

オオタカ タカ目タカ科
Accipiter gentilis (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子市 2010.12.12/撮影：田中一郎

■**選定理由**：人里近い低山地で繁殖するため、これら森林地域の開発の影響をまともに受けており、生息環境が悪化している。

■**特徴**：全長55 cm内外，翼開長105–130 cmほど。カラスくらいの大きさのタカ。黒い眼帯と白い眉斑が特徴的である。昔からよく鷹狩りに使われてきた。おもに中型の鳥類を捕食する。低山地の森林生態系の頂点に位置し、良好な自然環境の象徴ともなる種である。

■**分布** 県内：ほぼ県内全域に分布。県外：国内では九州以北で留鳥。国外ではユーラシア大陸と北アメリカ大陸に広く分布。

■**保護上の留意点**：現在のところ生息調査，とくに繁殖状況の調査が不十分である。オオタカの生息地は各種の開発行為が行われる可能性の高い地域であり，その生息環境の保全には事前に十分な配慮が必要である。

■**文献**：—

執筆：田中一郎

ツミ タカ目タカ科
Accipiter gularis (Temminck & Schlegel, 1844)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



境港市/撮影：田中一郎

■**選定理由**：確認例が少なく，絶対的な数が少ないと思われる。

■**特徴**：全長25–30 cm程度，翼開長50–60 cm内外。ヒヨドリと同大か，キジバトより少し小さい。日本に生息するタカの中ではもっとも小さい。頭部は黒味が強く，体の上面は暗青灰色，目の周りには黄色いアイ・リングがある。小回りのきく体で林の中の小鳥や昆虫を追いかけ，捕食する。九州以北で夏鳥または留鳥として平地から山地に生息している。

■**分布** 県内：県内全域に生息しているが，記録は非常に少ない。県外：九州以北に留鳥。西日本では繁殖記録が少ない。国外ではモンゴル，中国東部，サハリン等で繁殖し東南アジアで越冬する。

■**保護上の留意点**：自然林の保護・保全が重要。観察例が少なく現在の県内の繁殖状況はよくわかっていない。早急に生息実態調査が必要と思われる。

■**文献**：30。

執筆：田中一郎

ハイタカ タカ目タカ科
Accipiter nisus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子市 2008.11.9/撮影：田中一郎

■**選定理由**：個体数が少なく環境破壊により生息場所が狭められている。

■**特徴**：全長35 cmほど，翼開長70 cm内外。オオタカに似ているが一回り小さく，キジバトくらいの大きさ。キーツ，キィ，キィと鳴く。主として小鳥類を捕食するが，ネズミなどの小動物を捕らえることもある。留鳥または漂鳥で山地の森林で繁殖。冬季には平地の林，河川敷，農耕地にも生息する。

■**分布** 県内：県内全域。県外：四国以北で留鳥または漂鳥，本州と北海道で繁殖。国外ではヨーロッパ，中近東，シベリア，東アジア等に広く分布。

■**保護上の留意点**：森林や農地の保全が重要。観察例が少なく，繁殖状況などの生態的な調査が十分でないため，今後，詳細な調査が必要である。

■**文献**：48。

執筆：田中一郎

ノスリ タカ目タカ科

Buteo buteo (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



西伯郡南部町 (会見町) 2010.2.22 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：冬季を中心に記録があるが個体数は多くない。
- 特徴**：全長55 cm内外，翼開長130 cm内外。頭部は淡褐色で，のどにひげ状の褐色斑がある。体色の濃淡や模様は個体変異があるが，体と尾の上面，わき腹は褐色。胸から腹にかけて黄白色で黒褐色の縦斑がある。飛翔時の翼下面は淡褐色で，風切先端と翼角の黒色斑がよく目立つ。低山で繁殖し，冬季には全国的に見られ，農耕地や河川敷上空で頻繁に停空飛翔をして，地上の小動物や小型の鳥類などを捕食する。
- 分布** 県内：県内各地の山林，農耕地，河川敷など。県外：四国から北海道，大東諸島，小笠原諸島に留鳥。
- 保護上の留意点**：草原や低木林，河川敷などの生息環境を保全するとともに，夏季の生息実態調査が必要。
- 文献**：18。

執筆者：岡垣大志

サシバ タカ目タカ科

Butastur indicus (Gmelin, 1788)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



米子市 2008.4.27 / 撮影：田中一郎

- 選定理由**：環境の変化で餌となるカエル，トカゲ，昆虫類の減少に伴い近年，秋の渡りに観察される数が激減している。
- 特徴**：全長50 cm内外，翼開長110 cm内外。ハシボソガラスほどの大きさのタカ。体の上面は褐色で，白い眉斑がある。喉は白く，中央に黒い線がある。下面は白く，褐色の横斑がある。九州～本州の低山地などで繁殖する。ピックイーと特徴のある声で鳴く。
- 分布** 県内：県内全域。近年観察例が減少している。県外：東南アジアで越冬し，九州から本州に夏鳥として渡来する。一部は南西諸島で越冬する。
- 保護上の留意点**：おもにカエルやトカゲ，昆虫類などを餌としているので，これらが多く生息できるいわゆる「里山」の環境を整備することがのぞまれる。
- 文献**：—

執筆者：田中一郎

クマタカ タカ目タカ科

Spizaetus nipalensis (Hodgson, 1836)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



クマタカ(右下) 広島県内 1991.8.19 / 撮影：栗原築波

- 選定理由**：県下の山林で繁殖するが個体数が少ない。
- 特徴**：全長70–80 cmほど，翼開長は150 cm内外と比較的短めで，幅が広く後縁にふくらみがあり，尾は長めで幅が広く，森林内での飛翔に適した形態。後頭の羽毛は長めで冠羽状。飛翔時翼下面の黒い横斑，尾羽の黒褐色の縞模様が目立つ。餌はノウサギ，ヤマドリ，ヘビなど，中型の哺乳類，鳥類，爬虫類。
- 分布** 県内：標高200 m以上の県下ほぼ全域の急峻な斜面をもつ山地森林に生息。県外：北海道，本州，四国，九州の山地森林。
- 保護上の留意点**：落葉広葉樹林を中心とした自然林の保護，森林伐採を伴う開発行為の抑制，針葉樹植林地の広葉樹林への転換と，荒廃を防ぐための間伐などの手入れが必要。
- 特記事項**：国内希少野生動植物種 (1993年)，鳥取県特定希少野生動物 (2002年)。
- 文献**：16, 33, 50。

執筆者：岡垣大志

イヌワシ タカ目タカ科
Aquila chrysaetos (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



滋賀県／撮影：保井 浩

■**選定理由**：県内での繁殖地は中国山地沿いに限られ、生息数、繁殖成功率も著しく減少し、絶滅の危機に瀕する（現在では数つがい程度）。

■**特徴**：全長90 cm、翼開長200 cmにもなる全身ほぼ黒褐色の大型のワシ。県内でのつがいの行動圏は60–90 km²と広大。急峻な岩棚や、大木の樹幹などで営巣し、1–2月に2卵産むが、育つのはふつう1羽。本来は草原性で、開けた場所で中型の哺乳類、鳥類、ヘビなどを捕食する。

■**分布** 県内：東部山岳地帯から大山山系までの落葉広葉樹林の、岩壁がそそり立つ急峻な山岳部に生息。県外：北海道、本州、四国、九州に生息。世界的には北半球に広く分布する。

■**保護上の留意点**：落葉広葉樹が主体の自然林の保護、生息地周辺の開発行為の規制、生息中心域へのカメラマン、観察者の接近の排除、生息地内の針葉樹植林地の広葉樹林化などによる狩場の創設などが望ましい。

■**特記事項**：国の天然記念物（1965年）、国内希少野生動植物種（1993年）、鳥取県特定希少野生動植物（2002年）。

■**文献**：16, 41, 42, 43, 51.

執筆者：岡垣大志

ハイロチュウヒ タカ目タカ科
Circus cyaneus (Linnaeus, 1766)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：—



米子水鳥公園 2009.12.20／撮影：桐原佳介

■**選定理由**：河川改修、護岸工事などにより生息環境のヨシ原が減少し、個体数が減っている。

■**特徴**：全長45–50 cm、翼開長100–120 cmほど。カラスと同大。雄は翼の上面が灰色で下面が白く先端部が黒い。雌の翼の上面は褐色である。冬鳥として農耕地、ヨシ原、干拓地などに渡来する。翼を特徴のあるV字型に保って帆翔しながら餌を探す。おもに野ネズミ類を捕食する。

■**分布** 県内：県内全域。チュウヒよりも個体数が少ない。県外：ヨーロッパ、アジア北部、北アメリカ等に広く分布。日本や東南アジアには越冬のため渡来する。北海道から九州地方までと広いが局地的である。

■**保護上の留意点**：近年河川や湖でコンクリートの護岸工事が進み、大規模なヨシ原は急速に姿を消しつつある。本来の水辺の環境を取り戻す対策が必要。

■**文献**：—

執筆者：田中一郎

チュウヒ タカ目タカ科
Circus spilonotus Kaup, 1847

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



鳥根県安来市 2008.1.14／撮影：田中一郎

■**選定理由**：河川改修、護岸工事等によりヨシ原が減少し生息環境が狭められている。

■**特徴**：全長50–60 cm、翼開長110–140 cm程度。カラスと同大。羽の色には個体変異が多く見られる。県内には冬鳥として干拓地、農耕地、ヨシ原などに渡来する。主として野ネズミ類や鳥類を捕食する。

■**分布** 県内：全域。県内での繁殖は確認されていない。県外：本州以北で局地的に留鳥、冬季は冬鳥として本州以南に渡来する。国外ではロシア、モンゴル、中国北部等で繁殖、東南アジアで越冬する。

■**保護上の留意点**：ハイロチュウヒと同じくヨシ原に依存しており、河川や湖などの護岸工事、河川敷のゲートボール場、公園の整備などにより生息環境が急激に悪化している。積極的かつ長期的視点に立った水辺環境の保護対策が早急に望まれる。

■**文献**：—

執筆者：田中一郎

ハヤブサ タカ目ハヤブサ科

Falco peregrinus Tunstall, 1771

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



雌 鳥根県斐川町 1992.1.12/撮影：栗原築波

■**選定理由**：生息数が少なく繁殖率が低下しており、危機的状況にある。
 ■**特徴**：全長40–50 cm程度、翼開長85–120 cmほどで、カラスより少し小さい。留鳥として平地から山地にかけての河川、農耕地、海岸などに生息。おもに小型の鳥類を捕食する。上空からの急降下は時速300 kmを超えるといわれる。

■**分布** 県内：県内の崖のある海岸部や河口付近、干拓地など。県外：九州以北に留鳥、冬季はほぼ全国的に海岸部や河川で見られる。

■**保護上の留意点**：県内の繁殖地は十数カ所に過ぎないと見られる。県東部の、ある繁殖地では風雨を防ぎ外敵が侵入しにくい理想的な岩棚の窪みがあり毎年安定して数羽のヒナが巣立っている。営巣に適した場所が限られているので人工的に岩棚や窪みを作って環境を整えてやることも今後が必要であろう。

■**文献**：—

執筆者：田中一郎

コチョウゲンボウ タカ目ハヤブサ科

Falco columbarius Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



広島県内 1998.2.8/撮影：栗原築波

■**選定理由**：海岸の自然植生、河川敷の草原などの開発により生息地が減少している。

■**特徴**：全長30 cm内外の小型のタカ。ハヤブサ類としては明瞭な眉斑をもつ。冬鳥として、海岸の森林や海岸砂丘、干拓地、河川敷、農耕地、ヨシ原などに飛来し、おもに小型の鳥類や小哺乳類を捕食する。

■**分布** 県内：県内の平野部の草原・ヨシ原・農耕地で観察されている。県外：全国的に冬鳥。ユーラシア北部と北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、日本、中国南部、北アメリカ南部、中米などで越冬する。

■**保護上の留意点**：平野部の草原・海岸の植生の保全が必要である。海岸や河川敷の安易な改変は避けるべきである。

■**文献**：—

執筆者：神谷 要

タンチョウ ツル目ツル科

Grus japonensis (Müller, 1776)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



成鳥 鳥根県松江市 2010.2.15/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：現在、国内では北海道東部に留鳥として生息するのみだが、米子市目久美遺跡から鳩骨、脛骨などの骨が出土しており、かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

■**特徴**：体高は140 cmあり、頭部は毛を欠くため赤い。湿原に生息し、ドジョウなどの小魚のほか、バッタなどの昆虫や植物も食べる。北海道東部のタンチョウは留鳥。

■**分布** 県内：現在は迷鳥としてまれに記録されるのみ。最近では2008年1月に米子市八幡で幼鳥1羽の記録がある。鳥取藩の本草学者平田眠翁著の「因伯産物薬効録」にはまれに飛来と記されている。県外：中国とロシアにまたがるアムール流域と国後島を含めた北海道に生息する。

■**保護上の留意点**：鳥取県では繁殖の可能性はないが、飛来したときには静寂を保つなど、十分な配慮を要する。

■**特記事項**：国の特別天然記念物（1952年指定）、「種の保存法」規制対象種。

■**文献**：13.

執筆者：井上貴央

クイナ ツル目クイナ科
Rallus aquaticus Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2010.3.13/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：確認記録が非常に少ない。生息地である水辺の草原やヨシ原が河川改修等で減少している。

■**特徴**：全長約30 cm。腹が暗灰色で、背中には褐色と黒色の縦斑があり、下腹部は白と黒の横縞模様。嘴は細長く少し下方へ曲がっていて、先端は黒く基部は赤い。前傾姿勢で尾を立てて歩く。「クィ、クィ」などと鳴く。鳥取県では冬鳥。湖沼や河川の草むらやヨシ原に潜んでおり、開けたところに現れることは少ない。昆虫や小魚などを捕食する。

■**分布** 県内：米子水鳥公園では毎年確認されているほか、米子市淀江町佐陀川、北条町天神川河口、気高町、鳥取市千代川、湖山池で記録がある。県外：北海道や東北地方では留鳥、それ以南の本州から南西諸島では冬鳥；ユーラシア大陸の温帯地域で繁殖、冬は南に移動して越冬。

■**保護上の留意点**：生息地である水辺の草むらやヨシ原の保全が重要。

■**文献**：—

執筆：桐原佳介

タマシギ チドリ目タマシギ科
Rostratula benghalensis (Linnaeus, 1758)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



撮影：田中一郎

■**選定理由**：県内で繁殖している可能性があるが、確認記録がきわめて少なく、生息状況は不明。

■**特徴**：全長24 cm。嘴は淡紅色で長く、目の周囲に勾玉のような形の白斑がある。雌は頭部が赤褐色で背中が暗灰褐色、腹は白い。雄は頭部から背中が褐色で、雌よりも地味な色をしている。翼を広げると先端が丸く、風切羽に水玉模様がある。雌は繁殖期に「コオーツ、コオーツ」と鳴く。水田、湿地、休耕田などに生息。

■**分布** 県内：羽合町でつがいが確認されているほか、米子市米子水鳥公園で幼鳥の保護記録がある。県外：本州中部以南で留鳥として生息しているが、冬期に南へ渡るものもいる。国外ではインドから東南アジア、中国南部、アフリカ、オーストラリア。

■**保護上の留意点**：生息環境である水田地帯、湿地帯の保全が重要。県内の生息状況が不明なため、生息実態の調査が望まれる。

■**文献**：36.

執筆：桐原佳介

イカルチドリ チドリ目チドリ科
Charadrius placidus J.E.&G.R.Gray, 1863

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



西伯郡南部町法勝寺川 2009.12.22/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：繁殖環境である小石が広がる河原や中州が減少している。

■**特徴**：全長21 cmほど。頭と背中は灰褐色で、腹は白く、額に黒帯があり、黄色くて細いアイリングがある。頭と胸の境に細い黒帯がある。脚は淡黄色。ピオ、ピオと鳴く。河原や水田、ため池の岸辺などに生息する。

■**分布** 県内：鳥取市千代川、倉吉市天神川、米子市日野川など、県内全域の河川の中流域や用水路、ため池。倉吉市天神川では繁殖が確認されている。県外：全国に飛来するが、北海道では夏鳥、本州から九州で留鳥、南西諸島では冬鳥。国外ではロシア、中国北部および東北部、朝鮮半島で繁殖、中国南部からインド北部で越冬。

■**保護上の留意点**：繁殖環境である河川や池等の砂礫地の保全が重要。

■**文献**：11.

執筆：桐原佳介

タゲリ チドリ目チドリ科

Vanellus vanellus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥根県出雲市 2010.2.15/撮影：桐原佳介

■選定理由：県内での越冬個体数が少ない。

■特徴：全長32 cmほど。後頭部に黒くて細長い冠羽があり、背中は金属光沢のある緑色。胸に幅広い黒帯があり、腹は白い。脚は暗赤色。幅が広く先端が丸い翼でふわふわと飛び、ネコのような声で「ミュー」と鳴く。冬鳥として水田や河川の岸辺、草地、干潟などに飛来する。

■分布 県内：県内全域の平野部や河口。県外：冬鳥として本州以南に飛来する。国外ではユーラシア大陸西部から中部で繁殖、ヨーロッパ南部、アフリカ北部、中国南部で越冬。

■保護上の留意点：生息環境である水田地帯や草地などの保全が重要。

■文献：12.

執筆者：桐原佳介

オオジシギ チドリ目シギ科

Gallinago hardwickii (Gray, 1831)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子水鳥公園 2010.8.29/撮影：桐原佳介

■選定理由：県内では標高の高い草原に生息地が限定され、確認例も少ない。繁殖の可能性があるが、近年は確認されていない。

■特徴：全長30 cmほど、くちばしは太くて長い。夏鳥としておもに北海道や本州北部の草原に飛来し、昆虫やミズなどを食べる。繁殖期にはズビーヤクズビーヤクと鳴きながら飛び、急降下するときにはザザザ・・・と尾から音を出す。

■分布 県内：春から初夏にかけて大山周辺の江府町、伯耆町、大山町で確認例がある。渡りの時期には平地でも観察できるが、他のジシギ類との識別が難しい。県外：北海道と本州中部以北およびロシア沿海州で繁殖。中国地方では広島県北西の芸北町で繁殖地が確認されている。オーストラリアで越冬。

■保護上の留意点：現在の繁殖状況は不明。生息実態調査が必要である。

■文献：39.

執筆者：土居克夫

ワシカモメ チドリ目カモメ科

Larus glaucescens Naumann, 1840

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



撮影：細谷賢明

■選定理由：冬鳥として鳥取県の海岸に飛来するが個体数は少ない。

■特徴：全長65 cmほど。セグロカモメより少し大きく、成鳥の背面は同じくらいの濃さの青灰色。初列風切はセグロカモメ、オオセグロカモメの黒色と異なり、背面より少し濃い灰色。セグロカモメ、オオセグロカモメに比べ、虹彩はより暗色で黒っぽく、嘴もより太く見える。

■分布 県内：鳥取県東部（鳥取市、岩美町）の漁港を中心とした海岸、河口での記録が多いが、琴浦町逢東の海岸でも記録がある。県外：アリューシャン列島、北米北部沿岸で繁殖し、日本では冬鳥としておもに北海道、東北地方に飛来する。

■保護上の留意点：鳥取県では繁殖の可能性はないが、飛来したときには静寂を保つなど、十分な配慮を要する。

■特記事項：ゴミや釣り具の不法投棄による誤嚥被害、ならびに港湾整備などにともなう採餌環境の変化が憂慮される。

■文献：30.

執筆者：岡垣大志

シロカモメ チドリ目カモメ科
Larus hyperboreus Gunnerus, 1767

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取市賀露 1994.1.27/撮影：田村昭夫

- 選定理由：冬鳥として鳥取県の海岸に飛来するが個体数は少ない。
- 特徴：全長71 cmほど。日本で見られるカモメ類中最も大きい。成鳥は頭部から腹部にかけて白色。背面は淡い青灰色で初列風切の先端部は白い。若鳥も他のカモメ類より淡い褐色で、3年目の春にはほぼ全身が白くなる。大型カモメ類の群中に混じることが多いが、色の薄さとひときわ大きな体が目立つ。
- 分布 県内：県内各地の河口、港湾部で冬鳥として記録されるが散発的。県外：ユーラシア大陸、北アメリカの北極圏、グリーンランド、アイスランドで繁殖し、日本では冬鳥としておもに北海道、東北地方に飛来する。
- 保護上の留意点：ゴミや釣り具の不法投棄による誤嚥被害や、港湾整備などともなう採餌環境の悪化が憂慮される。
- 文献：45。

執筆：岡垣大志

ズグロカモメ チドリ目カモメ科
Larus saundersi (Swinhoe, 1871)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



米子港 2009.4.26/撮影：千村隆司

- 選定理由：世界的な希少種（推定個体数10,000以下）で県内への飛来数も少ない。
- 特徴：全長30 cm前後、嘴の黒い小型のカモメで、ユリカモメと誤同定しやすい。体はユリカモメより一回り小さく、嘴はズグロカモメのほうが黒くて太く、初列風切の模様が識別ポイントとなる。日本には冬鳥として河口・干拓地など開けた海岸・湖岸に飛来するが、九州と西南諸島以外では個体数が非常に少ない。鳥取県にはごく少数が飛来する。カニ類が主食。
- 分布 県内：湯梨浜町、北栄町、米子市で記録されている。米子水鳥公園での観察例が多い。県外：中国の黄海沿岸や朝鮮半島北部の日本海沿岸などで局地的に繁殖し、日本、台湾、中国南部の海岸で越冬する。
- 保護上の留意点：カモメ類は釣り人が放棄したテグスなどで損傷することが多い。越冬地であってもこのような人為的要因で個体数を減少させることは避けるべきであり、対策が必要。
- 文献：—

執筆：神谷 要

コアジサシ チドリ目カモメ科
Sterna albifrons Pallas, 1764

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



淀江港 2009.4.29/撮影：千村隆司

- 選定理由：営巣に適した場所への人間（釣り人、四駆車など）の立ち入りで、近年繁殖数が激減し、個体数が減っている。
- 特徴：全長25 cm程度。雌雄同色。夏鳥として県内で繁殖する。群れで行動することが多く、海岸や河川の砂浜、中州、河原に集団で営巣する。
- 分布 県内：以前は千代川河口、天神川河口、日野川下流域で繁殖が確認されていた。近年は飛来はあるものの、繁殖は確認されてない。県外：日本では本州以南で繁殖。ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、北アメリカ中部から南アメリカ北部で繁殖。冬季は熱帯域で過ごす。
- 保護上の留意点：繁殖適地の保護および繁殖期における立入制限等の対応が必要である。
- 特記事項：鳥取県特定希少野生動植物。
- 文献：—

執筆：吉田良平

トラフズク フクロウ目フクロウ科

Asio otus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2008.12.15/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：生息地である林や草原、農耕地の減少している。飛来地が限定されていて、個体数も少ない。

■**特徴**：全長約40 cm。全身褐色で、黒褐色、茶褐色の複雑な斑紋がある。顔盤が発達していて、虹彩は橙色。頭部に1対の耳のような羽(羽角)がある。夜行性で、常緑樹や針葉樹の樹上の茂みをねぐらとし、日没後に農耕地で活動する。おもな獲物はネズミ類。

■**分布** 県内：鳥取市古海、鳥取市矢矯、米子市彦名干拓地で記録がある。近年では米子水鳥公園で少数が確認されており、鳥取市で新鮮な死体が拾得されている。県外：日本では、本州中部以北で局地的に繁殖し、本州中部以南では冬鳥。南西諸島ではまれ。国外ではユーラシア大陸および北アメリカ大陸の冷温帯で繁殖し、北方の個体は南下して越冬する。

■**保護上の留意点**：ねぐらとなっている樹木の茂みと、採餌環境となっているねぐらの周囲の農耕地や草原の保全が重要。

■**文献**：37.

執筆者：桐原佳介

コミミズク フクロウ目フクロウ科

Asio flammeus (Pontoppidan, 1763)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：—



広島県内 1998.2.8/撮影：栗原築波

■**選定理由**：近年の農耕地の環境変化・耕作放棄などにより、観察される回数が減少している。

■**特徴**：全長38 cm内外。山吹色の中型のフクロウで、日本には、越冬のために飛来する。農耕地やヨシ原など開けた地域で夕方に観察されることが多い。草地などでネズミなどを食べる。

■**分布** 県内：岩美町、鳥取市、湯梨浜町、北栄町、米子市、境港市の平野部で記録がある。県外：イギリス・ヨーロッパ全域・ユーラシア大陸北部・北アメリカ南部で繁殖し、熱帯から温帯にかけて越冬する。

■**保護上の留意点**：日本古来の農村環境の変化が、飛来数の減少の原因であり、農村全般の保全対策が必要である。

■**文献**：—

執筆者：神谷 要

コノハズク フクロウ目フクロウ科

Otus scops (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



八頭町(旧八東町)ふるさとの森/撮影：細谷賢明

■**選定理由**：山地の落葉広葉樹林に夏鳥として渡来するが数は少ない。

■**特徴**：全長20 cmほど、日本産フクロウ類中最小。体は灰褐色に褐色、黒色、淡橙色などの色が複雑に入り混じる。県内ではブナを主とする大木の残る落葉広葉樹林に生息し、おもに夜行性の昆虫類を採食する。5-6月頃樹洞で繁殖し、薄暗いときや、夕方から夜間にブツ、キョッコーと特徴のある声で鳴く。日中は薄暗いこずえでじっとしていることが多いため見つけることは容易ではない。

■**分布** 県内：ブナのある広葉樹林帯に生息するが局所的。県外：北海道から九州までの日本各地、ロシア沿海州地方、朝鮮半島、中国東北部に夏鳥として渡来。冬は東南アジアからインド、アフリカ大陸などで越冬する。

■**保護上の留意点**：これまで確認されている生息地の自然環境の保全とともに、県下で同様の環境を有する森林の保護に留意が必要。

■**文献**：26.

執筆者：岡垣大志

アオバズク フクロウ目フクロウ科
Ninox scutulata (Raffles, 1822)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



日南町 2004.7.25/撮影：桐原佳介

- 選定理由**：近年、観察例が減少した。
- 特徴**：全長30 cm内外。雌雄同色。夏鳥として渡来し、平地から山地の公園・神社などの巨樹の樹洞で繁殖する。県内ではおもに平野部の社寺林や低山地を中心に生息し、4月から9月にかけて夜間に鳴き声が聞かれる。ホーホーという鳴き声は特徴があり識別しやすい。小鳥やカエルも食べるが、メニューは昆虫が主体。県内での繁殖は確実だが、調査資料は乏しい。
- 分布** 県内：県内各地の平野の樹林で記録がある。県外：日本全国、東アジアで繁殖し、南アジア、東南アジアで越冬する。
- 保護上の留意点**：本種の繁殖地となる平野や低山地の林地は宅地開発等によりどこでも面積が減少傾向にある。また一見、よく保護されているようにみえる社寺林でも営巣に適した樹洞のある巨樹は減少傾向にある。大径木と林地面積の確保が最重要であるので、それらの調査ものぞまれる。
- 文献**：—

執筆：吉田良平

フクロウ フクロウ目フクロウ科
Strix uralensis Pallas, 1771

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2010.4.21/撮影：桐原佳介

- 選定理由**：営巣に用いる巨木の減少などで個体数が減少傾向にあるとみられる。
- 特徴**：全長50 cm程度の大型のフクロウ。雌雄同色。留鳥として低山から亜高山までの各種の樹林に生息し3-5月頃繁殖する。おもにネズミなどの小型哺乳類や小鳥を捕食する。県内では平野部から雑木林などの山林で観察されるが、時には市街地周辺でも声が聞かれている。ゴウホウ、ゴロツケ、ゴッホウと聞こえる特徴のある鳴き声により識別は容易。
- 分布** 県内：県内の人里近くの山林、農耕地で記録がある。県外：南西諸島をのぞく日本全国；スカンジナビア半島からシベリア、極東ロシア、中国東北部、朝鮮半島。これらの全域で留鳥。
- 保護上の留意点**：樹洞を供給する巨木の確保（または巣箱の設置）が重要と考えられる。また小型哺乳類を主食とするため、生息にはある程度広面積の樹林を必要とする。夜行性のため、鳴き声の目立つ鳥である割には繁殖状況の資料が乏しいので、それらの調査ものぞまれる。
- 文献**：—

執筆：吉田良平

ヨタカ ヨタカ目ヨタカ科
Caprimulgus indicus Latham, 1790

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



三朝町中津 1987.7.8/撮影：細谷賢明

- 選定理由**：1975年頃から西日本では急速に本種の確認例が減少しており、鳥取県でも同様の傾向がみられる。
- 特徴**：全長30 cm程度。雌雄同色。夏鳥として4月頃渡来し、中国地方ではほぼ標高500 m以上の山地に生息する。灌木まじりの草原をとまなうやや明るい落葉広葉樹林や針葉樹林に多い。昼間は木の枝に腹を密着するように休息しており視認は困難だが、夜間にキョキョキョキョキョと独特な声で鳴き、いれば存在を把握しやすい。日没前後より空中を飛翔しながらガなどの飛翔昆虫を捕食する。繁殖期は6-8月頃。
- 分布** 県内：1995年以降の確実な記録としては、鳥取市河合谷高原、八頭町ふるさとの森、倉吉市、琴浦町船上山、大山町大山があるのみ。県外：南西諸島をのぞく日本全国、東アジアで繁殖し、南アジア・東南アジアで越冬する。
- 保護上の留意点**：草原や灌木が適度に混じる明るい樹林の維持が重要。繁殖状況の確認のための調査も必要。
- 文献**：—

執筆：吉田良平

ヤマセミ ブッポウソウ目カワセミ科

Ceryle lugubris (Temminck, 1834)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



西伯郡南部町 2005.7.11 / 撮影：田中一郎

■**選定理由**：生息適地，個体数ともに少ない。

■**特徴**：全長40 cm内外で日本産のカワセミ類中最大。頭部には目立つ冠羽があり，容易に同定できる。腹部下面は白，頭部や背，翼上面にかけては白黒のまだら。雌雄ほぼ同色だが，雄の顎線と胸は橙褐色を帯びる。留鳥として，県内各地の山間部の河川・湖沼・ダムで年中観察される。平野部ではまれ。餌は淡水魚，カエル，サワガニなど。土質の切り立った崖に横穴を掘って営巣する。繁殖期は3-8月。

■**分布** 県内：山間部の河川・湖沼・ダムのほぼ全域でみられる。県外：屋久島・種子島以北の日本全域，南千島；アフガニスタンからベトナム中部，中国南部から東北部。

■**保護上の留意点**：よく目立つ鳥であり，目撃記録は少なくないが，県内の営巣地があまりよく把握されていない。営巣適地を把握したうえで，それを保全することが望まれる。

■**文献**：—

執筆者：吉田良平

アカショウビン ブッポウソウ目カワセミ科

Halcyon coromanda (Latham, 1790)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



日野郡江府町 2010.6.15 / 撮影：田中一郎

■**選定理由**：スギなどの人工林の増加により，営巣に適した広葉樹の大径木が減少し，生息環境が悪化している。

■**特徴**：全長27-28 cm程度。全体に赤橙色の体と赤く大きな嘴で非常に目立つ鳥。雌雄ほぼ同色。夏鳥として山地の林，溪流に渡来する。ピオロロロと聞こえるよく通る特徴的な雄のさえずりで存在を確認しやすいが，谷間のよく繁った薄暗い林内を離れないため姿を見る機会は少ない。サワガニ，カエル，小魚などを捕食。5-7月頃，樹洞や崖の洞穴に営巣。

■**分布** 県内：奥山の林，溪流にみられるが，個体数は少ない。県外：南西諸島から北海道まで日本全国と朝鮮半島，中国東北部，ヒマラヤからタイ北部で繁殖。フィリピン，インドネシアなどで越冬。

■**保護上の留意点**：ブナなどの広葉樹林の保護および再生が必要。営巣のための樹洞を供給する大径木の保護も重要である。

■**文献**：—

執筆者：吉田良平

ブッポウソウ ブッポウソウ目ブッポウソウ科

Eurystomus orientalis (Linnaeus, 1766)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



西伯郡南部町 (西伯町) 2010.7.7 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の繁殖例が顕著に減少している。

■**特徴**：全長30 cm内外，足とくちばしは赤く，体は濃青色。夏鳥として5月初旬から落葉広葉樹や針葉樹の里山にすみ，樹洞や巣箱で繁殖する。ゲグッと鳴き，餌は大型の昆虫。1970年代までは県内各地で確認されていたが繁殖に必要な樹洞の減少や巣穴として利用していた木製電柱のコンクリート化のため減少した。現在は巣箱の設置により日南町，南部町では数が増してきた。

■**分布** 県内：巣箱による繁殖は日南町，南部町，三朝町で確認。八頭町では自然木で1つがいが繁殖。県外：本州，四国，九州，極東ロシア，朝鮮半島，中国東北部，オーストラリア東海岸で繁殖。東南アジア等で越冬。

■**保護上の留意点**：樹洞のある大木や木製の電柱がなくなったために減少したと考えられる。巣箱の設置は有効。

■**特記事項**：鳥取県特定希少野生動植物 (2002年指定)。

■**文献**：6.

執筆者：土居克夫